

# 日本図の変遷 ～赤水から伊能～

小野寺淳 平井松午

おのでら・あつし 1955年、東京都文京区生まれ。放送大茨城学習センター所長、茨城大名誉教授、歴史地理学会会長。

日本図の作製は、国に関する図の作製が命じられた大化の改新まで遡ると想定される。しかし、その後の奈良時代や平安時代に国司から提出された国図をもとに作製された日本図の存在は知られていない。

奈良時代から室町時代までの日本図は、京の山城国を中心に国々が俵を連ねたように並ぶ横長の日本図であり、僧の行基（六六八～七四九年）作とされる図が多い。これを「行基図」と称す。

一六〇七（慶長十二）年には行基作とされる「大日本国図」が『拾芥抄』にあり、最古の刊行日本図といわれる。

この日本図や横浜市の特名寺蔵「日本図」（神奈川県立金沢文庫保管）、

一六二四（寛永元）年刊行とされる「大日本国地震之図」などには龍とおぼしき生き物が国々の周囲を囲むように描かれる。この龍を黒田日出男・東京大名誉教授は疫病神や外敵追放の国土境界と説明する。

行基図は東を陸奥、西を五島

列島、南を土佐、北を佐渡とする方位観で認識されたことを示す。行基図の世界観は、やがて中国や朝鮮半島との交易、東南アジアとの朱印船貿易によって、海を隔てた国々や地域との距離感、日本列島の形状を把握するようになって変わっていく。

大航海時代の西欧で作製された世界図は、戦国時代にポルトガルやスペインから、江戸初期にはオランダから球体を示す横長の小判型世界図としてもたらされた。地球儀ももたらされたから、世界が球体であったことは当時の為政者、知識人には知られていた。

中国にきたイエズス会宣教師マテオ・リッチは、西欧の世界図に記された地名を漢字に置き換えた。マテオ・リッチ系世界図に描かれた日本列島の北は東北地方であったが、浮世絵師石川流宣が描いた一六八七（貞享四）年「新版日本国大絵図 本朝図鑑綱目」（流宣図）はいまだ中世の日本の姿であった。

流宣図は能登半島を北に、北端には「韓唐」と記された朝鮮半島の南が描かれ、東端には蝦夷の南端が描かれる。浮世絵師らしく、海岸線の屈曲をデフォルメし、海上に波や船を描くなど絵画的意匠がみられる。国郡、石高、城下、名所の他、右下に主要道の里程の一覧表を載せた大型図ではあるが、国の形は俵状のままであった。

◇  
長久保赤水と伊能忠敬という巨匠が作製した日本図とその影響をたどり、日本人がいかなる国土観を獲得したか考えたい。



「大日本国地震之図」神戸市立博物館所蔵、17世紀前半 木版一部手彩 39・8×27